

---

〈山本通先生御退職記念座談会〉

# 問題としてのヴェーバー『倫理』 テーゼ

---

経済貿易研究所主催

2016年11月30日（水）13：30～15：30

神奈川大学 1 号館502会議室

---

座談会参加者

山本 通（経済学部教授）

佐藤睦朗（経済学部准教授）（司会）

田島佳也（経済学部教授）

松村 敏（経済学部教授）

谷沢弘毅（経済学部教授）

五嶋陽子（経済貿易研究所所長）



（山本通氏）

【司会（佐藤）】 今日はお忙しいところ、座談会にご参加いただきまして、ありがとうございます。本日の座談会は、山本通先生の刊行予定のご著書：『禁欲と改善—近代資本主義形成の精神的支柱—』（見洋書房、2017年）に関連するお話を中心として、ご報告いただくという形で進めたいと思います。まず初めに、経済貿易研究所所長の五嶋陽子先生からお言葉をいただきたいと思います。

【五嶋】 経済貿易研究所では2012年から、定年退職される先生を囲んで座談会を開き、研究や研究生活の回顧、それから当該研究分野の潮流の理解、大学教育の環境の変遷などを記録するという企画を行っております。今回は山本通先生から「問題としてのヴェーバー『倫理』テーゼ」に関するご研究をじかに伺うことがかなうということで、この日を大変楽しみにされてこられた先生方も多くいらっしゃる

存じます。マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』は、わが国の経済学部生の必読書としてあまりにも有名ですが、諸説・諸評価を踏まえて、山本先生のご研究の深淵に接近することは、私たち年下の者にとりまして、近代資本主義の形成を理解する上で新たな知見を得るものと思います。それでは、よろしくお願いいたします。

**【山本】** このたび、経済貿易研究所からありがたい補助を頂きまして、本を刊行することができるようになりました。前任の所長の松村先生と現所長の五嶋先生には本当に御礼申し上げます。この本は、ここ10年ぐらいの研究成果をまとめたものですが、実を言うと、私の学部の人に抱いた疑問がずっと引きずられて、やっとここで纏まったという感じがありますので、自分自身の研究者としての生活をずっと振り返るような、そういう思いを抱きながら纏めていったものでもあります。そういうことで、内容についてもお話はしたいですけど、それとともに、神奈川大学での私の生活をも振り返りながらお話ししたいなというようなことを考えております。あまり肩の凝らない感じでお話したいと思っております。

実は、私がヴェーバーの『倫理』テーゼというのに初めて出会ったのは、一橋大学2年次に、外池正治先生のゼミナールでレポートを全員が書かされた時でした。ヴェーバーを読んでみろと言われて渡されて読んでみたところ、それが大変面白かったのですが、どうもわからないところがあって、引っ掛かってどうしようもないという感じでした。それで、ヴェーバーのみを対象としたレポートではなくて、ほかにもトーニーの『宗教と資本主義の興隆』とかいろいろ読んで、1つの研究ノートみたいなのをまとめて、『一橋』という学生懸賞論文雑誌（1～2年次生用）に出しました。そうしたところ、外池先生のバックアップはあったと思いますが、一応佳作になりました。やはり、それが私の研究者としての出発点となったと思います。

とはいえ、とにかく問題は難しいので、しばらくは逃げていました。それで、ヴェーバーの問題は横目に見ながら、イギリスのクエーカーという1つの

セクトの歴史を追究しました。その研究がまとまった頃に、もう一度この問題が気になり出しました。ヴェーバーの『倫理』テーゼについては、ずっと日本でも論争がありまして、その論争をたどるだけでも面白いのです。

1970年代には、御茶の水書房の広報誌『社会科学の方法』で論争が展開されました。ヴェーバーを批判する側は、歴史家でウェスレーを研究していた岸田紀さんや京都大学文学部の越智武臣さんなどです。これに対して、ヴェーバーの立場からこれを反批判するとか、弁護する側には、世良晃志郎さん（法制史）や鈴木良隆さん（経営史）などがおられました。さらに、ヴェーバー研究者の安藤英治さんが論争に加わり、非常に面白い論争が展開されていました。

その論争自体は、一応結論的には歴史家たちが指摘するような問題があるということには間違いないけれども、ヴェーバーの理解社会学の方法を前提とする限りは、あまり大きな問題はないのだというふうな形で終わったのです。それでも、やはりその後いろいろとヴェーバー・テーゼについては批判がありました。

90年代に入って、山之内靖さんが『ニーチェとヴェーバー』（未来社、1993年）や『マックス・ヴェーバー入門』（岩波新書、1997年）を書かれたのですが、これらはヴェーバー批判ではなくて、日本でのヴェーバー研究の在り方が間違っているという、そういう見方を提起されている本です。ヴェーバーは近代主義者たちによって担ぎ上げられたのですが、ヴェーバー自身は決して近代主義者ではなくて、彼には反近代の志向性が非常に強かった。むしろニーチェあたりに影響を受けているのだと、そのところを見過ごして近代主義的に解釈されてきていると指摘されています。

それから96年には、椎名重明さんの『プロテスタンティズムと資本主義：ウェーバー・テーゼの宗教史的批判』（東京大学出版会、1996年）という本が現れて、序論辺りで根底的な批判をされています。中身に入っていくと、なかなか難しくついていけないような内容なのですが、方法論的な批判がなされています。

2000年には、経営史家の渡辺喜七さんもヴェーバー批判をされています（『アメリカの工業化と経営理念』日本経済評論社、2000年）。この説に、私も近い立場にあります。渡辺さんは、「ヴェーバーが説くごとく、近代資本主義の発展の重要な要素は勤勉と節約のエートスである。しかし、この倫理それ自体は西欧中世にも存在したし、日本の徳川期の儒教倫理にも内在していた。この宗教倫理は、近代化を生み出す絶対条件ではなく、従って近代化の精神的エートスにはなり得ない。自由の精神と個人主義のエートスなしの勤勉と節約の倫理だけでは、新しいビジネス・パラダイムを理性的に展開し得ないのである」と書いておられます。私と一緒にではないのですが、少し似た形のヴェーバーに対する姿勢を示しておられます。

最も新しいものは、羽入辰郎著『マックス・ヴェーバーの犯罪』（ミネルヴァ書房、2002年）です。これは、ちょっと大騒ぎになりました。私も、この辺りからやはりヴェーバーをまともに取り扱って、きちっと自分なりの立場を明らかにしなければいけないなと思い始めました。

ヴェーバーの『倫理』テーゼを批判するのは実は簡単で、ヴェーバーはあっちこっちでヘマをしており、間違いや自己矛盾が多くありますし、困ったところもいっぱいあります。ですが、それらをいくら批判してもあまり意味がないというか、それだけではヴェーバー支持者を説き伏せることはできません。むしろ、新しい近代資本主義形成の論理みたいなものを自分で出してみないといけないということがわかってきて、それをやるのに10年ぐらいかかったわけです。

具体的には、対象としてはフランクリン研究というのが非常に面白くて、それができた辺りで何とかなるかなという感じがしてきたのですが、その後、モキアというアメリカの経済史家の「産業的啓蒙」という概念が非常に魅力的に感じられてきました。それを梃子にして見直すことができるかなと思って、それでまとめてみたのが、『禁欲と改善』です。以上が、本書のあとがきに書かれている概要です。

**【司会】** ありがとうございます。それでは、先生がたどり着かれたヴェーバー批判の内容を簡潔に教

授いただければ幸いです。

**【山本】** 多くのヴェーバー支持者は、ヴェーバーの「資本主義の精神」論を、ちょっと本人の意向と違った形で受け入れているのではないかと思います。例えば、17世紀のピューリタンの職業倫理と18世紀にフランクリンが説いた職業倫理に共通するのは、禁欲的な職業倫理であり、従って両者には継承関係があることから、プロテスタンティズムの倫理から資本主義の精神が生まれたと主張している、と理解している人が多いと思います。ですから、近代化の論理になるのですが。

実は少し違っていて、ヴェーバー自身はプロテスタントの職業倫理も資本主義の精神も、決して合理的なものだとは考えてなくて、非常に非合理的な、人間の合理的な幸福とは全く違った非合理的な情念で動かされているというふうに言っているのです。特にプロテスタントの職業倫理について問題にしているのは二重予定説ですが、これは生まれる前から既にその人が救われるか呪われるかは決まっているという非常に恐ろしい教で、その恐怖を和らげるために必死になって職業労働に勤しんだ、とヴェーバーはとらえています。

フランクリンの思想についても、これは明るい職業倫理じゃなくて、倦まずたゆまず働くべし、と脅迫的に教える、ちょっと狂ったような感じで命令している、と理解しています。

しかし、ピューリタンの予定説やフランクリンの思想を少し調べたりするだけで、多くのヴェーバー支持者が理解しているようなことは全く言っていないことがわかります。そこのところは、ヴェーバーの何か思い込みがあってやっているのかもしれない。ともかく、もしかするとヴェーバーは、単なる禁欲的職業倫理だけでは近代社会は生まれなかったと思っていたのかもしれない。少々異常な、マシステリーみたいな状況がないと近代社会は生まれなかった、と考えたのではないかと思います。ですが、そういったものは実はなかったと思うわけです。

それでは、何が近代社会を作ったのかということになりますが、これはまさにヴェーバーが全く問題にしなかったルネサンスとか、科学革命とか啓蒙主

義とかが実は大事な役割を果たしたのではないか、というふうに思うわけです。ルネサンスの流れをくむところの啓蒙主義によって、産業革命の頃に新しい役立つ知識を実際の工業経営などに適応させる動きが出てくることで、初めて近代資本主義が生まれてくるのではないか、というふうに考えているわけです。

禁欲的職業倫理を典型的に示しているのは、フランクリンではなくてデフォーです。18世紀前半に現れたデフォーは、フランクリンよりも1世代前の人物です。彼の『イングランドの完全な商人』という二巻本の大きな本がありまして、その中身の要点をまとめたような形で、フランクリンは禁欲的な職業倫理を唱えているのですが、小規模な商工業者としての評判を得るために、勤勉に働いて、質素な暮らしをして、約束はきちんと守り、借金を作らないでこつこつ働く、というのが大事なのだということを盛んにデフォーとかフランクリンは言っているわけです。

この関連で面白いことは、リスクを取ってはいけなと言っているのです。危ないことに手を出さなくて、盛んに言っているわけですね。ですが、新しい時代が生まれてくる頃の技術革新なんていうのは、まさにリスクを取らないと出てこないわけです。ここでいうリスクを冒すというのは、例えばシュンペーターが言うような革新的な新結合（創造的破壊）というものです。そのようなものがないと、新しい工業経営の在り方とか生まれてこないですね。

モキアが言う産業的啓蒙というのは、シュンペーターが言うところの新結合のうちの新しい工業技術の在り方に関連してくるものであるわけです。そういったものがないと、特にイギリスの産業革命なんていうのは、実際見ていくと、禁欲的職業倫理だけでは生まれないというか、その当時の企業家の活動を見ていくと、禁欲的職業倫理だけじゃやってないですね。

こうしたことから、禁欲的職業倫理と革新的企業家精神と、それから産業的啓蒙、そういう3つが産業革命期の企業家の精神的な支柱であったというふうに考えているわけです。本の後ろのほうでは、労働者のほうを扱っているのですが、近代的な工業経営が始まると、工場の規律にきちっと従うような労働者が必要となってくる一方で、産業革命期の労働者というのは決してそのようなものではなく、毎日の生活リズムと1年間の生活リズムのいずれもむちゃくちゃでした。このため、生活を規律化していくというのは非常に大事なこととなりました。そのためにも随分いろいろな文化的な運動や活動があって、その中では福音主義なんかは大きな影響を果たした、と考えています。

大体このような中身になります。

【司会】 ありがとうございます。それでは、ここからは山本先生に質問等を振っていただきたいと思います。まずは松村先生、いかがですか。

【松村】 ちょっとよくわからなかったのは、禁欲的精神だけでは近代社会は生まれなかったというので、ルネサンス以降の啓蒙主義だとか、科学革命だとか、そういうのが重要だったとおっしゃられましたが、私の理解では、ヴェーバーは別にそれらが重要でないとか、否定しているわけではないと思いますが、いかがでしょうか。ヴェーバーは、そういう啓蒙主義や科学革命が重要でないと言っているわけではありません。

【山本】 重要ではないと言っているわけではないのですが、問題にしてないですね。

【松村】 だから、それを言っても。

【山本】 それはそうです。ヴェーバー批判にはならないですね。おっしゃる通りです。それはそうですけど、歴史、経済史の立場から資本主義の形成というものを見る場合は、そういったものが必要じゃないかということを言っているだけです。

【松村】 そうですね。別にヴェーバー批判ではないということですか。

【司会】 かえってヴェーバー学説の補強のように私には思われます。ヴェーバーは、全て禁欲的職業倫理の問題に集約させようと若干無理をしているところがあると思われます。山本先生が提起された3つの柱をふまえて議論したほうが、歴史としては説明しやすいのではないかと考えます。

【松村】 そうですね。おっしゃる通りです。それはそうですけど、歴史、経済史の立場から資本主義の形成というものを見る場合は、そういったものが必要じゃないかということを言っているだけです。

【松村】 そうですね。別にヴェーバー批判ではないということですか。

【司会】 かえってヴェーバー学説の補強のように私には思われます。ヴェーバーは、全て禁欲的職業倫理の問題に集約させようと若干無理をしているところがあると思われます。山本先生が提起された3つの柱をふまえて議論したほうが、歴史としては説明しやすいのではないかと考えます。

【松村】 ヴェーバーは、もともと禁欲的職業倫理で近代社会が生まれたなんて言っているわけじゃない

でしょう。

**【山本】** ヴェーバーはそうは言ってないのですが、ヴェーバーの議論を基にしながら、特に大塚史学の方々はそういうふう言うわけですね。大塚史学の方々がまとまって書いた少し古い本を読むと、イギリス資本主義の形成について、非常に図式的に、中産の生産者層が中世の末辺りには局地的市場圏をつくり、それから17世紀ぐらいには地域的市場圏をつくった、とされています。彼らがまさにピューリタンだと言うわけですね。中産の生産者層＝ピューリタンで、彼らが禁欲的職業倫理を実践しながら、前期的資本と戦った、と整理されています。

**【松村】** そういう大塚史学の図式的なものを批判しても、現在はそれほど意味がないのではないのでしょうか。

**【山本】** ええ、ですが、私としては、ヴェーバー批判の部分と近代資本主義の精神的支柱の部分と2段階で、本当はあとのほうが言いたいのであって、ヴェーバー批判が主なテーマではないのです。もっとも、今日の座談会では、ヴェーバーがテーマですね。

**【松村】** ちょっと話が飛びますが、ヴェーバーから離れますけど、科学史なんかのほうでは、今までの西洋史の図式で言うと、17世紀科学革命があって、18世紀産業革命につながるという話ですが、実際には17世紀の科学革命においては、実用化とは関係のない部分も少なくなかったのではないのでしょうか。

**【山本】** 科学史のほうでは、そういうふうに言われていますよね。パーチュオーソと言って、暇人というか、貴族とか地主の人たちで暇を持て余している知識人たちが面白がっているいろいろやった、そういうものであって、実際の現場の生産活動とはあまり関係なかったのだということはよく言われています。ですが、それをつなげることが実際にはあったのだということが、マーガレット・ジェイコブとかモキアが最近言っていることです。それをつなげるための手段というのは、いろいろありました。例えば、実験道具を持ちながら、あちこち回って講演をしてお金を稼いでいるような、職業的な巡回科学実験講師という人がいたそうです。また、さまざま



(座談会風景)

の場所で文芸哲学協会というのができたとか、そういったものを通して暇人がやっていた科学研究というのが、だんだんと民間の現場の生産活動につながっていった、ということ言うわけです。

**【松村】** それはイギリスの話ですか。

**【山本】** イギリスの話です。イギリスでそれはできたけど、ほかのところではなかったというか、フランスなんかではあまりそういうことはなかったのですね。それが早くイギリスではできたから産業革命が展開したのだというのが、ジェイコブとかモキアの理論です。

**【松村】** それはヴェーバーの話とは全然違う話ですね。

**【山本】** ええ。

**【司会】** 谷沢先生、何かございますか。

**【谷沢】** 私のやっていることと全く正反対のことを先生はやられていますので、ここでお話をする資格があるのかなというのが素直な気持ちです。ちょっと私としては心苦しいので、全外的外れなことになるかとは思いますが、あえて感想を述べたいと思います。先生のご著書は、結局、ヴェーバーの著作を日本でどう解釈して、それを膨らませていったかという、そういう大きな歴史があって、その中で、ものすごく狭く言えば、史料批判だけやる人もいれば、先生のように資本主義と本当に結び付けて議論する人もいるし、あるいは、どちらかと言えば精神史だけをやっている人もいます。アプローチがかなり多様なのかなということを、今回わかりました。

私は2008年から2009年頃に知ったのですが、北海道

大学の橋本努さんでしたか、ヴェーバーのための批判のホームページを立ち上げたりしていました。その時からの漠然とした感覚で、ヴェーバーって、こんなに今でも情熱を持って激しく議論される存在なのかなと、そういうふうには単純に、ものすごく不思議に感じた記憶があります。

いろいろな批判とかそういうことよりは、先生の人生の中におけるヴェーバーの位置付けみたいなもの、何となく少しはわかったような気がします。すみませんが、素人なもので、このぐらいのことしか言えません。

**【司会】** ヴェーバーの多面性は確かにその通りだと思います。このため、ある意味とつつきやすい反面、論争が絡み合わなくなる傾向があります。そういう点は気を付けなければならないように思われます。

**【谷沢】** よく言われるのは、古典と言われるものは大体多面的だと表現されるけれども、まさに古典としてのそういう資格が十分、この『倫理』にはあるのかなということを、あらためて思い知らされたところはあると思います。

**【松村】** 個人的に知りたいところなんですけど。山本先生の話から少しずれるのですが、日本のヴェーバーとかそういうふうになると、戦後の大塚史学あたりですぐ出てくるわけなんですけど、世界的な現象だったのかなと思っています。1950年代、60年代かな。アメリカの社会学の本をちらちら見ていると、やはりヴェーバーとマルクスが出てくるのです。だから欧米学問界とただ並行しているのか、それとも何か違うところがあるのかとか、衰退というか、あまり言われなくなるというの、同じなのか違うのか。その辺のことを、山本先生の今日の話も日本での論争の紹介がありましたけど、欧米まで含めると山ほどあるのでしょうか。欧米まで含めると、ヴェーバーの論争なんていうのは山ほどあるのではないのでしょうか。

**【山本】** 山ほどあると思いますね。

**【松村】** 最後、モキアが出てきますけど。戦後、外国の論争に日本人学者が参入するとか、そういうのではないのでしょうか。知らなくて参入しなかったのか、知っていて参入しなかったのでしょうか。

今、グローバル化の時代、国際化の時代だから、そういう世界的な視野でのヴェーバーをめぐる議論はどうだったのかなと前から思っているのですが。

**【山本】** それについては、私はちょっとわかりません。70年代に御茶ノ水書房の広報誌：『社会科学の方法』で論争が行われて、その中で、あれは世良さんでしたっけね、ヴェーバーが作っている理念型というのはあくまでも理念型だから、それを歴史学の立場から批判するのはおかしいと、意味がないというふうにおっしゃっています。それはそうなのでしょうが、ヴェーバー自身が、資本主義の精神がプロテスタンティズムの倫理から生まれたと、因果関係で最後、締めくくっちゃったのですよ。あの論文をね。

しかも、この論文はそれを論証するために書かれたと書いているのですね。それは全く自己矛盾で、資本主義の精神とプロテスタンティズムの倫理は、理念型として親和関係があるとかね。そういうふうに言えば、それで済むことなのですけど。

**【松村】** そういうふうに書いてなかったですかね。

**【山本】** 親和関係があるということは、歴史的な問題じゃないのですよね。全然ね。

**【松村】** じゃあ、私は相当誤読しているのだ。

**【山本】** そのところは問題で。これがおかしいのだというのが、椎名さんが以前から明確に言っているのです。ヴェーバーの最大の欠点はそこであると。だけど継承関係というか、因果関係でとらえてしまった結果、それが歴史家の中に入ってきてしまっているわけですね。

**【松村】** そうですね。

**【山本】** そこから話がややこしくなったのですね。

**【松村】** あの本の親和的であるという表現もあるでしょう。

**【司会】** あります。それもあります。

**【山本】** 最初はそう書いています。親和関係を調べたいと書いていて、最後には継承関係があるって言うっちゃってるのですね。そこはおかしいことで、ただ親和関係だけで言うと、歴史にはならないわけです。例えばヴェーバーの有名な『一般社会経済史要論』（黒正厳・青山秀夫訳、上・下巻、岩波書店、

1954年) という本があるのですが、まさに概念の列挙で、とても歴史ではないですね。そういったものを使って経済史の授業をやろうと思ったこともあるのですが、とてもとても、自分自身が理解することも難しいし、どうすればいいか分からなくて困ったことがありました。

ヴェーバーはあくまでも理解社会学で通すべきだったのが、それが『世界諸宗教の経済倫理』とになると、そうでもない。歴史的な考察に陥ってしまっているから、そのこのところがちょっと変なところがあるのですよね。

【松村】 ヴェーバーを好意的に受け止める人は、その書き出しを評価するのでしょうか。

【山本】 そうでしょうね。そっちが本意であったと。あとのほうは筆が滑ったというふうに言えばいいんですけど。そうすると、全体としては一体何が言いたかったのか分からなくなっちゃうのですよ。その辺が難しいところです。

【司会】 五嶋先生、何かございましたら、どうぞご発言ください。

【五嶋】 今のお話の延長線上になりますけれども、社会学と歴史学の親和的關係だとか、社会学と歴史学の関わりだとかというような観点をもしとらえた場合には、先生がヴェーバーをご研究された中で、どういうふうなことが考えられるのでしょうか。

最近、学際的な領域という形で、これまで仕切られていた学問がちょっと垣根を下げて、お互いにクロスオーバーしていく中で学問の深さ、広がりを求めるというところはちょっとあるように思うのですが、歴史学と社会学の關係はいかがでしょうか。

【山本】 ヴェーバーの社会学のさまざまな概念などは、歴史学を考える上でのヒントになるという、そこでとどめておくべきじゃないかなと思います。例えば「カリスマ社会学」とかは、そういうカリスマが登場して、その結果、時代が大きく変わるというような、そういうアイデアをもらってきて活かすだけであって、それ以上やると危ないのではないかなと。あくまでもこれは理論、あるいはモデルであって、モデルを借りてきて役立てるという形で歴史学をやっていくのがいいかなと思います。これはもう歴史学の立場からの話ですが。

社会学のさまざまな理論とか、あるいは経済理論なんかもしっかりと勉強して、それを取り入れてくればいいんだけど、取り入れる時のやり方を気付けないと、危ないと思いますね。まるでモデルが一人歩きして、という感じになりかねないかなと思いますよね。

【谷沢】 今回のご著書というのは、あくまで経済史の中に位置付ければいいのかということで、よろしいですかね。

【山本】 はい。経済史のつもりです。

【谷沢】 経済史の視点からヴェーバーの『倫理』を読み直す、という意味でしょうか。

【山本】 読み直すというか、ヴェーバー的な理論で近代社会の形成を説明していた人たちの理論を批判するという感じですね。一応想定している人たちはあるわけですけどね。それを表に出してはいません。

【谷沢】 この本で非常に面白いと思ったのは、「はじめに」の2ページで、「国内の商工業の発展に伴って、さまざまな種類の仲買商や小売商の商業網が全国的な規模で成立した。そうすると「社会的信用」が経済行為の最も重要な基礎であることが、商工業者たちに認識されることになる」と書かれている点です。この部分は、私が今やっている研究に密接に結び付いています。何かと言うと、当初は繊維で言うと、買継商とか仲買商とかというのがいて、それがいわゆる信用貸しですね。無担保で商品を買取ったり売ったりして、後で決済している。ところが、もうちょっときちんとしてくると、手形が導入されてきます。要するに、債権債務関係にある1つの書類上で明確化するというところがあり、そうか、そのものずばりが「信用」なんだというふうに、改めて認識しました。これは確かに日本でもそうだよなという感じです。これは必要だよなという感じがですね。

その延長線上でいろいろ幾つか考えていて、ここでは申し上げませんが、日本の経済発展の中においても、これというのは近代に至るまで、いろんな形で変革しつつ発展していつている状況じゃないかなということで、非常に共感を持っています。やっぱり重要なことなのじゃないかなと思いますし

た。

【山本】 どうもありがとうございます。

【谷沢】 よく、ある特定の中小工業業者が、まさに工業化＝産業化であって、産業革命を推進していくというよりは、やはり曖昧模糊とした第3のセクターですよ。要するに、いわゆる物流というか、商業というか、これをもっと一生懸命盛り立てるというか、そういう意味でも、このご主張というのは結構役に立つのではないかと私個人では思いました。

【山本】 私はあまり日本史のほうは詳しくないのですが、経営史の教科書を見ると、17世紀あたりには商業の世界でも、いわゆる紀伊国屋文左衛門みたいなタイプの、何て言いましたっけ。

【松村】 前期的商人資本。

【山本】 大塚史学ではそういう言い方しますが、何て言いましたっけ（注：「初期豪商」と呼ばれる）。半ば武士で、半ば商人であるような人たちが、朱印船貿易なんかもやっている。そういう商人たちが闊歩していたのが、17世紀末頃までにはこういう商人たちが没落して、むしろさまざまな種類の仲買商人が生まれてくるということを言われていますよね。

半ば武士で、つまり帯刀していて、半ば商人で、しかも投機的な取引を行って巨額の富を得るといって、そういうタイプの商人たちの活動が次第に没落していった、全国的な規模での流通網ができてきて、しかも仲買のレベルが非常に分化していった、ということが享保期ぐらいに、18世紀初め頃には日本でも一般化してくる、と書かれていますよね。

そういう時に、ちょうど石門心学とか出てきて、大きな店では家訓や家法といったものができてくる。そういう時代というのは、まさに商人の信用とか評判とか、そういったものが確立してきたのだと思います。

【谷沢】 ここに書かれている、ちょっと私が読んだところの前のところに、「17世紀末ないし18世紀初めの西洋と日本では」と書かれている。日本を追加したのは、まさにそういうお考えがあってということですよ。

【山本】 この辺は、斎藤修さんのものなんかをちょ

っと意識して書いているのですがね。同じように、アダム・スミスの成長というのはこの時期に展開していたのだという話です。そういうタイプの経済成長の在り方に、まさにその禁欲的職業倫理はぴったり合うわけです。

【田島】 ヴェーバーのいろいろな職業倫理とか、昔から私も諸田實先生のところで勉強していた時、いろいろなことを聞きました。あらためて今日聞いて、人間にとって、先生の文章でもよく出てくる、「合理的なもの」というのは、どういうところを指すのかというのがよく分かりません。

資本主義の精神と合理的なもの、先生の中で一緒に論じられています。そうすると、人間にとって合理的なものというのは、要するに、資本主義の精神から言えば、利益を追求して、利益を出すということなのではないでしょうか。そういう中で会社が運営されていくような社会というのは、それなりに正当化しているから、それが合理的なもの、ということなのではないでしょうか。それから外れるような行動をする人間は、みな非合理的になってしまうのでしょうか。その辺は、合理とか非合理という言葉というのは括弧付きで使われていますけども、資本主義の精神から考えると、その辺はどういうふうに理解したらよしいのですかね。

【山本】 ここで言っている合理的とか非合理的というのは、現世的な幸せか否かというような意味で、例えばベンジャミン・フランクリンに代表されるような啓蒙主義の考え方というのは、人がいかにすれば幸せに生きていけるかということを問題にしているわけで、それは宗教的なことと関係ないのです。ところがキリスト信者、特にカルヴァン主義者たちというのは、現世的な幸せというのはどうでもいいわけで、死んだらどうなるかという、死んだ後に自分たちは救われるかどうか、天国に行けるかどうか、そちらが問題なわけです。

ヴェーバーが言っている禁欲的な労働というのは、今幸せになるためじゃなくて、死んだ後、神様によってオーケーと言われて天国に行けるかどうかという、そのところを気にしながら、今一生懸命働いている。だからヴェーバーに言わせると、これまるで非合理的であると。現世的な幸せというの



を全く無視して、とにかく必死になって働いているという、そういうふうな意味ですよ。

ですから、宗教の目的は来世の幸せであって、啓蒙主義の幸せは現世的な幸せ、とはっきりそういうふうには言えると思いますね。

フランクリンは来世の幸せなんて何も考えてないですね。自分1人のことじゃなくて、みんなを幸せにしたいという思いで、いろいろやっているわけで、そこをところをヴェーバーは全然見ていません。私はそこをすごく強調しているのですけどね。

【谷沢】 宗教を経済の中で扱うというのは、「まえがき」のところで大学者ばかり挙げておられますけれども、最近では西重郎『経済行動と宗教—日本経済システムの誕生—』（勁草書房、2014年）が出されています。お読みになられてご感想はありますか。

【山本】 読んでないですね。

【谷沢】 そうですか。あの先生なんかもそんなことやりだして、何で今更にああいうことやってきているのかなと私はちょっと不思議に思ったのです。そういう意味からすると、宗教から経済史を解き明かすというのは、少しまたブームになろうとしかけているのかなという感じもありますよね。

【松村】 ここにも出てきましたけど、山之内靖さんの岩波新書があるでしょう。『マックス・ヴェーバー入門』ですか。あれに私は大変に感銘を受けて、わかったような気がしたのですけど。私のヴェーバーのイメージというのは、自分も近代人だから合理的な面があるし、迷信なんて信じてないし、一生懸命勉強しなきゃいけないと思っている一方で、そういう自分、合理的な近代人である自分にも批判的な、古代的な情念に魅力を感じているのではないかというものです。山之内さんの本を読んでからこのように思うようになりました。

【松村】 彼（ヴェーバー）は、当時から有名な学者で、それなりに尊敬されていて、熱心なクリスチャンで。クリスチャンじゃないってどこかに書いてありましたけど、一応はクリスチャンで。子供の時からそういう教育を受けてきて、そうである自分にいささかの不満があったのでしょうか。

【山本】 自分ですごく反発を感じているのでしょう

ね。

【松村】 ただ、それがすごい反発なのか、ちょっとした反発なのかと言えばあんまり大きな反発じゃないような気がするのです。そうでなければ、研究なんかやめてしまったのではないのでしょうか。

【山本】 ヴェーバーについてはあんまりよく知らないけど、お母さんが非常に厳しい方ですね。

【松村】 山之内さんもよく書いておられますけど、古代史についての著作が圧倒的に多いじゃないですか。古代の人々の、近代には見られなかったような、本当は見られなかったかどうか知りませんが、そういうのに惹かれているという。そういうイメージは概ね正しいのか、それともちょっとおかしいのか。

【山本】 多分そうだと思いますけどね。ヴェーバー自身が自分は宗教的な音痴だと言っているという、有名な話ですけど。

【松村】 だから、少し冷めたところがある。

【山本】 むしろ自分に対しては抑圧的なものとして、キリスト教から逃れたいという感じがあったのではないのでしょうか。よくわかってはいるけど、自分自身は知識としていろいろ教えられても、基本がついていけないということで、そういう信仰の世界から出てきたのではないかと思いますね。

信仰というのを失うというか、まじめなクリスチャンを馬鹿にしているような、そういう表現があちこちに出てくるのですけども。クエーカーの集会に行ってみたけれど、内なる光を感じてお祈りする人は誰もいなかったとか、書いたりもしています。あと、バプティストが川で洗礼する時についても、それについて描写して、からかったりしたなんていうこともあります。

【松村】 それは20世紀の初めぐらいでしょう。17世紀とか18世紀と違って、20世紀の話だし。ヴェーバーも20世紀人であるに過ぎなくて、特に特異なタイプじゃなくて、今のイギリス人なんて大体みんなそうじゃないですか。さめて、クリスマスイブなんか全然お祈りに行きやしませんから。日本の正月と一緒に骨休めの時間です。というだけのことなんじゃないですか。だから別に、ヴェーバーがその当時として特異な存在じゃなくて、ごく平均的な人間の

ような気がしますけど。違いますかね。

【山本】 ヴェーバー研究者ではないので、何とも言えないのですが。

【松村】 えっ？ 先生、ヴェーバー研究者じゃないのですか。

【山本】 ヴェーバー自身について研究しているわけじゃないので。

【松村】 なるほど。

【谷沢】 聞こう聞こうと思っていた点があります。締めくくりに適した質問だと思いますが、歴史研究の中で、精神だとか、あるいは禁欲でも何でもいいし、そういうものというのが先生の中でどういうふうに位置付けられているのですか。そのものずばりだから、位置付けられる物もないだろうと言うのですけれども、何かお考えがあれば教えてください。なぜそんなこと聞かかという、そういうのって歴史研究者としてはあんまりやる人が、昔と比べても少なくなったじゃないのかと思うからです。

【山本】 そうですね。難しいですね。

【谷沢】 それを、逆に先生は仕方ないことだと思うのか、やっぱり精神面のことはある程度一定の人たちはずっと一生懸命研究すべきだと思われているのか、どういうふうに考えればいいのかと思います。例えば産業史をやっている人だとか、あるいは政策史をやっている人とは、先生の研究分野はちょっと違いますので、そこらはお聞きしておいたほうがいいのかなと思ひまして。

【山本】 宗教とか精神とかいうのは、数量化できないしね。証明のしようがないので、すごく扱いにくいですけど。それでも、やっぱり歴史を動かしている、人間は心を持っているわけで、それは問題としてはあるだろうなと思います。あまりそれをやる人がいないから、1人ぐらいやる人がいてもいいのではないかと思いますね。

【司会】 田島先生、何かございますか。

【田島】 先生のこの文章に、本学部にいらっしゃった内田芳明先生の研究が出てきてないのですが、内田先生のヴェーバー研究というのは、先生はどういうふうに位置付けられているのでしょうか。一時期、先生は一緒だったですね。あまり接点なかったのですか。

【山本】 私は内田芳明先生の後任で来たのですが、全く接点がなかったです。内田先生の本を読んだのですが、あまり印象に残っていません。学生時代に読んだのですけど。一度もお会いする機会がありませんでした。一度、まだ来てから1年目ぐらいの時でしたか、内田ゼミがまだあって、内田先生は非常勤で時々来てらしたみたいで、ゼミの学生が私のところへ来て、一緒に会いに横浜国大に行きましょうと誘われたので、約束をして出掛けて行ったのですけど、すっぱかされてしまいました。

【田島】 あの先生はそういうところありました。

【司会】 時間がほぼ来ましたので、山本先生、今日は本当にありがとうございました。ご著書が出たら拝読したいと思います。ご出席の皆さま、どうもありがとうございました。これで座談会を終わりたいと思います。

【山本】 私も勉強になりました。どうもありがとうございました。